

## 莊子「胡蝶の夢」確認テスト（老莊思想） 解答・解説

### ■ 解答・解説

問1 読み：むかし／働き：「者」は時を表す語に添えて語調を整える助字で、それ自体は訓読しない（読まない置き字的な用法）。「昔者」で「むかし」と読む。

問2 読み：くくぜん／意味：のびのびと楽しげに舞うさま。蝶がひらひらと心地よく飛ぶ様子。

問3 読み：がぜん／意味：にわかにならぬ。突然。

問4 読み：きよきよぜん／意味：はっと目覚めたさま。まぎれもなく自分（莊周）であるさま。「栩栩然」と対になる語。

問5 万物がそれぞれ形を変えて移り変わっていくこと。ここでは、莊周が蝶へ、蝶が莊周へと姿を変えるように、すべてのものはたえず別のものへと変化してゆき、その境ははっきりとは定まらない、という莊子独自の考え方を指す。

問6 莊周（そうしゅう）夢に胡蝶と為る。

（解説）「為」は「なる」と読む。「夢に」は「夢の中で」の意。

問7 ウ（たのしむ）

（解説）「愉」は本来「たとえる・さとす」だが、ここでは「愉（たの）しむ」に通じ、「自愉」で「自分で楽しむ」の意。「適志（志に適ふ）」＝思いのままに満足する、とつながる。

問8 （自分が）莊周であることに気づかない（＝自分が莊周だとは少しも思わない）。

（解説）蝶になりきっていて、自分が人間の莊周であるという意識がない状態。

問9 にわかにならぬ目を覚ますと、まぎれもなく（もとの）莊周である。

（解説）「蘧蘧然」＝はっと目覚めて、確かに自分自身であるさま。

問10 （目覚めたあとでは、）莊周が夢の中で蝶になったのか、それとも蝶が夢の中で莊周になっているのか、わからない。

問11 莊子は、人間と蝶、夢と現実といった対立するものの中に、絶対的な区別はないと考えるから。夢の中では蝶が真実であり、覚めれば莊周が真実であって、どちらが本当の自分かを決めることはできない。すべては相対的で、対立を超えて等しいとする「万物斉同」の立場に立つため、どちらが夢でどちらが現実かを問うこと自体に意味がないとするのである。

問12 イ

（解説）傍線部の「之」は「胡蝶の夢」のように主語と述語の間に置かれ、連体修飾（～の）を表す格助詞的な「之」。イ「周之夢（周の夢）」が同じ用法。アの「此之謂物化」の「之」は目的語を前に出す働き（＝これを之れ…と謂ふ）で別用法。ウ・エは「これ（代名詞）」。

問13 （解答例）人と蝶に区別はあっても、たがいに姿を変えて移りゆくものとしては一つに通じあう、という見方。（41字）

**問14** 此れを之（これ）物化と謂ふ。

（解説）「此之謂～」は「此れを之（これ）～と謂ふ」と読む定型。前の「此」を強調して受け直す「之」で、「これこそを～と呼ぶのだ」のニュアンス。

---

**問15** イ

（解説）「胡蝶の夢」は、夢か現実かの区別がつかないこと、転じて人の世や栄華のはかなさのたとえとして用いられる。

---

**問16** 記号：イ／読み：か

（解説）文末の「与（與）」は「か」と読み、疑問や詠嘆（…だろうか）を表す助字。ここでは「胡蝶となった夢か、莊周となった夢か」と問いかける疑問の用法。アの「並列の与（…と）」は「周与胡蝶」の「与」の用法であり、混同しないこと。

---

**問17**（解答例）莊子は、人と蝶、夢と現実のように対立して見えるものも、見方を変えれば優劣も差別

（区別）もなく等しいと考える。これを万物斉同という。だからこそ、どちらが夢でどちらが現実かという対立にこだわらず、その境を取り払った境地に立つのである。

---

**問18** あれこれと人の手を加えず、作為やはからいを捨てて、天地自然のあるがままの理に従って生きること。欲やはからいで物事を区別・支配しようと思わず、自然と一体になって生きる態度をいう。

---

**問19** (1) 上善は水のごとし。

(2) 水はあらゆるものに恵みを与えながら、人のいやがる低い所に身を置き、決して他と争わないから。老子はこの「争わない（不争）」あり方を最高の善（理想の生き方）と見て、無理に人と競い高ぶることのない柔軟な生き方を説いた。

---

**問20** (1) 足るを知る者は富む。

(2) 今あるもので十分だと満足できる人こそが、心の上で本当に豊かな人間だ、ということ。いくら多くを手に入れても満足を知らなければ心は貧しく、欲を抑えて満足を知ることが真の豊かさだと説いている。

---

**問21** 人物名：莊子（莊周）／思想：老莊思想（道家、または道家思想でも可）。

---